



●ブック紹介「紙さまの話」

【著者】大平一枝 【写真】小林キユウ

【出版社】誠文堂新光社

本書は各界クリエイターに思い入れのある紙アイテムを取材した紙と人をつなぐ物語。

柚木沙弥郎氏のパリの暮らしが見える紙はPAULのバゲットの紙袋、守先正氏のデザインの原点は1961年発行の十円切手「花シリーズ」白い花に対して背景が紫やこげ茶やグレー。ピンクの花には黒。配色の大人っぽさに目を奪われたと。この本を購入したきっかけは12軒の老舗の包装紙が綴じられていたこと。

著者の言葉に「包んで贈り、中身を取り出されたら役目を終える。包装紙はたまゆらの命。しかし、それはかない一瞬に、店の威信や誇り、時代の香りやもてなしの心が詰まっている。おいしいものを包んできた脇役は、主役がなくても粹で美しい。」

紙好きにはたまらない一冊である。

(副主催：渡邊裕美)



●新刊紹介一花の色名なら

「花と短歌でめぐる二十四節気花の色いろ」

季節の案内人：俵万智、花・写真：浦沢美奈

色監修：橋本実千代・吉川京子

KADOKAWA『花時間』特別編集、B5判

2025年12月22日発売、2,250円+税

二十四節気ごとに短歌とフラワーアレンジメントを紹介し、その時季ならではの花のエピソードを「色」とともに味わえる内容です。

季節の花やアレンジメントから色をすくい上げ、日本およびヨーロッパの伝統色名をあてています。

巻末には、花の色を基に選んだ290色のCMYK値一覧を収録しました。これらの数値は伝統色名を基準にしつつ、花の写真の色に合わせて微調整した参考値です。

人の目を通して「美しい」と感じるものは、数値化できない“何か”が宿ることを改めて実感させられます。

近年、「白は200色ある」という言葉が独り歩きしていますが、実際に白の色名がそこまで多いわけではなく、花に多い白の色名を探し、適切にあてはめる作業は想像以上に難しく、同時に色の奥深さを感じる体験もありました。

(橋本実千代・吉川京子)

●大辞泉ひろいよみ 107一し

色心：しきしん。仏語。物と心。物質と精神。色情。

色身：しきしん。仏語。物質的なものからでできている、からだ。肉体。三十二相をそなえた仮の生身。法身。

色神：しきしん。色覚

色神異常：しきしんいじょう。色覚異常。

色素：しきそ。発色のもととなる物質。可視光線の波長の一部を吸収し、それ以外を透過または反射させて色を出す。天然色素と合成色素とに大別され、天然色素は動物色素・植物色素の生体色素と、顔料などの鉱物色素とに分けられる。

色素細胞：しきそさいぼう。色素を産生・保有し、体色を発言するもとになる細胞。

色素性母斑：しきそせいぼはん。褐色から黒色を呈する母斑。黒あざ。ほくろ。母斑細胞母斑。

色素体：しきそたい。植物細胞の中にある、色素を含有する小体。葉緑体、それに似た構造をもつ有色体・白色体などがある。

色素蛋白質：しきそたんぱくしつ。色素とたんぱく質とからなる複合たんぱく質。ヘモグロビン・チトクロムなど。

*大辞泉：小学館発行国語辞典（永田泰弘）